

はじめに

本書は「財団法人 住宅総合研究財団」の2010年度出版助成を得て
出版されたものである

大量の二酸化炭素排出による地球温暖化や気候変動を阻止するために、あるいは原子力発電の悲惨な事故を防ぐために、再生可能な自然エネルギーの開発と省エネ技術の開発は、今まさに各国の緊急の課題である。しかしこの省エネに消極的な大国、さらに多くの発展途上国がある。省エネに無関心のまま、もし次々と発展途上国が先進国と同様のアメリカ型大量生産・大量消費の生活に突入すると、ある予測によると、80年後には、現在の技術で採掘可能な石油資源は枯渇してしまうと言う。

すなわち現在の石油の確認総埋蔵量をその年間総生産量で割算すれば、石油は40年程で枯渇し、さらにここ数年間に発見された、あるいはその後の発見を想定した海底大型油田の究極総埋蔵量を考慮すれば、2倍の80年程度で枯渇すると言う。そして中国などの経済成長が加速すればこの数字は減少する。

現在の掘削技術では海底原油の30%程度しか採掘できないが、地下に海水や炭酸ガスを注入する二次回収、さらに化学攻法とかガス攻法を駆使した三次回収では回収比率は60%になり、石油の寿命は140年に延びる。さらにその後はタールサンド、オイルサンド、オイルシェールなどがあり、石油の寿命は300年になる。しかし二次、三次回収の海底油田以降の高度な採掘方法や環境対策には膨大な費用を要する。従って少なくとも現在の採掘方法による石油は80年後に、場合によってはそれ以前に枯渇することになる。^{注1)}

80年後と言えば、今の学生たちの孫の時代にあたる。まだ見ぬこの未来の人類のために、今生きている我々が、地球の限られた資源を今温存し、人類の生活を継承できるようにすることが求められている。自分に直接関係のない遠い未来の子孫の生活のために、自分自身の行為を自制することが地球環境倫理である。この倫理に基づく主要な行為の一つは、省エネ技術の開発努力である。この開発を確実に推し進めるためには、まず先進国や発展途上国の人々が自主的に、自然と共生しようと思うようになることである。そのためにはとにかく現在の大量生産・大量消費に基づく生活態度や価値観を変え、自然共生型の生活と文化の具体的なイメージを、それぞれの国でもつことができるように提案する必要がある。

2011年3月、巨大地震と巨大津波が原因で福島原発の事故が起きた。それを私はパリのホテルで知った。数日後私たちが共催する国際会議のためにイスタンブールに移動した。両都市では原発存続問題が連日テレ

ビで議論され、原発反対のデモもあった。フランスでは、歩道ですれ違う人、アパートの窓から身を乗り出した人たちから何度も声をかけられた。それは日本に住む外国人は全員国外脱出という新聞記事が続いていた時であった。日本人を受け入れたいというトルコの親日家の申し入れもあった。トルコの大学の教授からは、このような大惨事なのにどうして日本人はあのように冷静で規則正しいのかと聞かれた。わが国でも事故から9カ月後の今、原発再開が大きな問題になっている。事故のあった3月までのわが国のエネルギー政策は、半数以上のエネルギーを原発で賄おうというものであった。それはしかし、今となつては国民的合意からは、ほど遠いものであろう。そこで以前にも増して、自然エネルギーの利用や自然と共生する省エネ生活が求められることになった。

わが国の自然は、モンスーン地帯に立地している。そのため1年間に平均約1,500mmの雨が降る。この雨が山の幸、海の幸をもたらしてきた。しかし一方では、地震や台風や干ばつなどが多くの人命を奪ってきた。だから人々は自然の恩恵に浴しながらも、常に自然を怖れ、畏敬の念をもって自然に接してきた。魑魅魍魎が住むと信じられる自然の中でも特に、神が降臨するという磐座や大樹や滝や山々に対して、幸せな生活を祈願してきた。また針や包丁や櫛などの生活道具でさえ「供養」してきた。西欧人は「物は物だよ」と、「供養」を理解できない。しかし日本人は、物も人と同じような存在だと思っている。だから物が満ち足りていても「勿体無い」と思う日本人独自の心が今もある。年間平均約数10mmの雨しか降らない砂漠地帯の自然は恐ろしい。いつも豊かな恵みを期待できるわが国の自然からは想像さえできないものである。この厳しい自然は常に人々に死を予感させた。そこで生まれた神は、彼が創造した人間のために、自然を資源として与えたと教えた。

今のわが国には、この独自の自然観に基づいて開発してきた伝統的住環境技術がある。それが比較的まだ残っているのが京都の町家である。その住環境技術だけではなく、住まい手の心遣いや生活態度、その文化までが、そこにはまだ残っている。その伝統的住環境は、実は省エネ技術の宝庫である。そしてその背後にある住まい手の生活態度やその文化は伝統的住環境技術を産出した源泉であった。

江戸300年は鎖国のため、国外から資源を輸入することはなかった。生活は日本列島の資源に依存する自給自足であった。さらに藩ごとに新田を開拓し、特産品を開発し、苦勞してそれぞれの自給自足の生活を維持した。木材へのエネルギー依存のため、日本の山々の植生は、石油に

依存する現在に比べて貧弱であった。幕府も奢侈禁止令や町式目などによって節約を強制した。このように江戸時代には省エネのための様々な工夫が行われた。

しかしこの厳しい時代に「いき」の文化が生まれた。京都では「いき」ではなく「すい」と言う。儉約や節約の生活を、着物や住まいなどの美しい姿にまとめた。現在、省エネのために緑化を奨励するが、緑被率だけが問題になり、どのように緑を植えるのかは議論にならない。今、省エネによってどのような文化を創造しようとしているのかが見えてこない。

谷崎潤一郎は『陰翳礼讃』の中に書いている。「暖房にしろ、便器にしろ、文明の利器を取り入れるのに勿論異議はないけれども、それならそれで、なぜもう少しわれわれの習慣や趣味生活を重んじ、それに順応するように改良を加えないのだろうか。注2)」「もしわれわれがわれわれの独自の物理学を有し、化学を有していたならば、それに基づく技術や工業もまたおのずから別様の発展を遂げ、日用百般の機械でも、薬品でも、工芸品でも、もっとわれわれの国民性に合致するような物が生れてはいなかったであろうか。注3)」

これはまさに今の我々に必要な文化論である。明治以降の急速な文明化のために、日本人はその国民性を否定し、忘れ、西欧の文物を急いで生活の中に導入した。多くの技術や科学を吸収し、消化し、いまや科学技術では世界の最先端にいる日本が、ここでもう一度、明治からの歴史を見直し、その国民性、自然や気候、固有の文化とともに、わが国の日用百般の機械、薬品、工芸品、そして住環境技術を見つめ直すべき時ではなからうか。特に今回の原発事故はそれを強くわれわれに教えているのではなからうか。

第I章は、その周辺環境に負荷を与えない伝統的な住環境技術について、職人や住まい手や研究者によって議論を重ねた結果を、環境構成要素別に、さらに空間構成要素別にまとめた。また盛夏と厳冬に、現存する京町家6邸の温熱環境を実測調査すると同時に、住まい手にヒアリング調査を行い町家に対する意見を聞いた。

第II章は、環境技術を生み、それを支えてきた住まい手たちの生活態度についてである。それは何事にも儉約を旨とし、物を大切にし、派手でないこと、町内の人々との共存を大切に生活の内容から知ることができる。江戸300年の間に培われた町衆の心意気である。これらを住まい手との討論や、京言葉、すなわち(1)物にかかわる言葉、(2)自

分自身に向けられている言葉、(3)他者との関係の言葉からまとめた。またこの町衆の生活態度は禅の修行の教えに似ている。

第III章と第IV章は、文化の形成である。第III章は京町家の建築空間にかかわる文化の形成である。町衆の生活は幕府が幾度も出す奢侈禁止令や町掟に縛られていた。その中に江戸時代の文化が花開いた。伝統的住環境技術に支えられた空間は、自然環境に調和し、地味ではあるが美しい町並み景観を形成した。町並みの奥に育まれた庭や座敷や茶室は、また表とは異なる独自の世界を形成していた。機能を充足するための技術が多様な美的存在になっていた。日本人の生活はもともと美や芸術や文化と一体であった。緑化やCO₂削減といった地球環境問題への取り組みによって、どのような文化を形成するのか。逆にどのような美意識や価値観がCO₂削減や地球環境問題を解決できるのか。両者を統合する全体像とは何か。京町家の建築空間、設しつい、庭等々の生活空間からうかがえる当時の美意識は、伝統的住環境技術をどのように支えていたのだろうか。

第IV章は、京町家の庭にどのように独自の文化が形成されたかを述べる。平安時代末から始まる遁世者の営んだ山居の草庵を源流として、中世から近世に至る京の町で、町人の居住文化「市中の山居」が展開された。それは、王朝の雅と山里の風景感を底流に、茶の湯の侘びの文化と、町人の活力によって花開いた。高密度な都市型住居である京町家の中にあって「市中の山居」がどのように豊かな生活文化を形成しているかをヒアリング調査や新しい庭園デザインによって紹介する。

注釈

注1) 月尾嘉男「月尾嘉男の『環境革命の真相』 第9回 通説とは相違する環境問題の視点 (2009/3/6)」 <http://eco.nikkeibp.co.jp/article/column/20090304/100943/>

注2) 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』1933 (中央公論新社, 1975) p.14

注3) 谷崎 前掲 p.16

はじめに 参考文献

・谷崎潤一郎『陰翳礼讃』1933 (中央公論新社, 1975)

京町家の環境技術と生活態度そして文化の形成

目 次

はじめに	1
第Ⅰ章 伝統的住環境技術	7
Ⅰ. 1 京町家の基本的な空間構成	
Ⅰ. 2 伝統的住環境技術の諸相	
Ⅰ. 3 京町家の温熱環境の実測とヒアリング調査	
第Ⅱ章 生活態度	63
Ⅱ. 1 生活態度を支える価値観と禅	
Ⅱ. 2 物にかかわる態度	
Ⅱ. 3 自分自身にかかわる態度	
Ⅱ. 4 他者との関係の態度	
Ⅱ. 5 態度を維持するための知恵	
第Ⅲ章 文化の形成	81
Ⅲ. 1 生活における美意識：「いき」と「すい」	
Ⅲ. 2 その他の美意識：「えずくろしい」「はんなり」「きんきん」「公道 ^{こうど} 」	
Ⅲ. 3 京町家と町並みの美：集住の美学	
Ⅲ. 4 組バラシ自由の集合体を作る装飾	
Ⅲ. 5 室内	
Ⅲ. 6 設 ^{しつち} い	
第Ⅳ章 京町家の庭と文化の形成	101
Ⅳ. 1 「市中の山居」の源流と展開	
Ⅳ. 2 京町家の庭の構成要素：原寸大の自然	
Ⅳ. 3 五感を通して楽しむ庭の自然	
Ⅳ. 4 「市中の山居」新しい試み	
あとがき	116